四つの季節の鉄道ものがたり

通学路

朝吹真理子

小学生のころ、学校から帰るときはひとりだった。私立の学校だったので、みなバスや電車に乗って通学していて、通学グループができているのだけれど、私はだいたいあぶれていた。たまにクラスメイトが仲間にいれてくれるのでいっしょに帰ったが、エッチな文言の書かれたティッシュの電話番号に電話をかけてみて、とか、難易度の高い要求をされたりする。嫌われたくなかったので、公衆電話からかけたけれど、自動音声の声がきこえたのが怖くて、すぐに切ってしまった。ほんとうにかけたなんてエッチ！と笑われたりして、ひとりで帰る方がいいな、と思っていた。

ときどき、隣のクラスのちゃきちゃきした財徳さんが、ＳＭＡＰの下敷きを持って、声をかけてくれる。彼女はＳＭＡＰの大ファンで、とにかくひとりでも多くの人に、この素晴らしいグループについて知ってほしい、という熱意があった。１９９４年くらいの話で、おそらくそのころからＳＭＡＰは有名だったとは思うのだけれど、当時の私はテレビをあまりみず、グループ名も財徳さんからきいて知ったくらいだった。声をかけられると、ひとりで帰らなくていいというちょっとした安堵感はありながらも、いつも困ったなあ、と思っていた。彼女がにっこりわらって、下敷きをみせながら、前回のおさらいとばかりに、私が全メンバーの顔と名前をおぼえているかをチェックされる。このひとはだーれだ、と聞かれて、どのひともおなじにみえるな、と思いながら、答えていた。地下鉄の階段をくだるとき、いつも地下から湿った風が吹いてくるのが怖かった。このままずっとくだりつづけるのではないかと思っていた。電車が行ったばかりだと心細くて、ホームの雨漏りをみながら待っていると、トンネルの奥から電車の光がみえる。電車がゆっくり止まるときの大きな音がすると、ほっとした。はやく家に帰りたかった。電車の窓の外が暗いところが好きで、いつもいま何時なのかがわからなくなる。冬の日は、座っていると、足の下からでる暖気が気持ち良くて、うとうと眠ってしまう。最寄り駅に着いたあと、おなかがすいてしかたがないときは、定期券に入っている５００円を取り出して、そばにある押

イラスト・岡林玲

みんてつ

CONTENTS
Vol. 74
2020

◎日本民営鉄道協会とは？
1967年に社団法人として設立、2012年4月1日付で一般社団法人に移行、73社の民営鉄道会社で組織されています。
輸送力の増強と安全輸送の確保を促進し、鉄道事業の健全な発達を図り、もって国民経済の発展に寄与することを目的とした活動を行っております。
なお、JR各社や公営地下鉄などは加入しておりません。

02 四つの季節の鉄道ものがたり
通学路
◉作家　朝吹真理子

04 基調報告58
「新常態」において
鉄道に求められること
◉関西大学経済学部　教授　宇都宮浄人

08 特集／コロナ禍と向き合う民鉄各社
［沿線のライフラインとしての責務を果たし、信頼を得る］
TOP INTERVIEW
コロナ禍の中で社会インフラとして
「安全・安心」な鉄道を維持する
◉阪神電気鉄道株式会社　代表取締役社長　秦　雅夫

12 REPORT I
阪神グループ一丸となって取り組む
「#ほっとはんしんプロジェクト」
◉阪神電気鉄道株式会社　沿線価値創造推進室　沿線活性化担当　課長　山崎由貴子・課長補佐　林　亮太（兼）経営企画室　広報担当）／都市交通事業本部　運輸部　営業課　課長補佐　篠原敬英・助役　清水美帆／スポーツ・エンタテインメント事業本部　甲子園事業部　歴史館・広告担当球場長代理　湯山佐世子／株式会社阪神コンテンツリンク　ビルボード事業部　マーケティンググループ　ビルボードライブ広報　松井絢香

17 INTERVIEW COLUMN
阪神グループと
地域をつないで沿線価値を向上する
◉取締役　沿線価値創造推進室担当　小川浩昭

18 REPORT II
コロナ禍を機に地域連携を強め
地域鉄道の存在を示す
◉秩父鉄道株式会社　代表取締役社長　大谷隆男

21 INTERVIEW COLUMN
地域とともにつくる観光コンテンツで
地域鉄道の魅力を発信する
◉取締役執行役員　企画部長　坂本昌己・主任　春山彩花

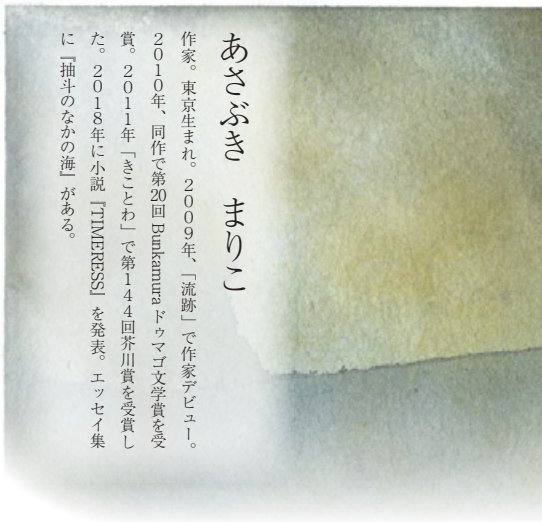
22 REPORT III
SNS戦略で
新たな関係性をデザインする
◉高松琴平電気鉄道株式会社　代表取締役社長　真鍋康正
◉管理本部　経営管理部　植野直樹／地域開発本部　リーダー　西山公章

26 ARCHIVES
民鉄はどのように向き合い鉄道を動かし続けたのか
コロナ禍における東急電鉄の感染拡大防止への取り組み
◉協力　東急電鉄株式会社

30 連載05　民営鉄道の起源を訪ねて―鉄路は何を目指したか
京福電気鉄道　嵐山本線・北野線
◉日本宗教史研究家　渋谷申博

し寿司屋で、ばってらを買った。その場で食べたいけれど、先生にみられるのが怖くて、家まで小走りで帰る。先生などいるわけないと思っても、後ろから見られているようで怖かった。

いっしょに帰って嬉しいひとが一人だけいた。ひとつ年上の先輩、幸さんは、ポニーテールの似合うひとで、いつも背筋がしゃんとのびていた。違う部活動だったが、夏休みの合宿が同じ場所だったことで、仲良くなった。私がよろよろ歩いていると、後ろから颯爽と歩く彼女から声をかけられる。「真理子ちゃん、こんにちは」と言う、その距離のある挨拶が好きで、顔が赤くなっていることを知られまいと思いながら、深々お辞儀をした。いっしょにいると舞い上がってしまって、なにを話していたのかほとんどおぼえていないけれど、ホームに降りたときに電車が行ったばかりだと嬉しかったし、最寄り駅に着く時間がもっと遅くならないかと思っていた。小学生にとってはひとつの年の差が果てしなく大きく思えていた。さきに最寄り駅に着くのは私だった。幸さんは「またね」と言うと、知らない人のような澄ました顔になって、座席に座っている。振り返っていつも幸さんのすがたをながめて、いつかあんなおねえさんになりたいと思っていた。あのころの幸さんは十二歳、私は三十五歳になったのに、十二歳の幸さんのほうがはるかに大人だったように思える。



あさぶき　まりこ
作家。東京生まれ。2009年、「流跡」で作家デビュー。2010年、同作で第20回Bunkamuraドゥマゴ文学賞を受賞。2011年「きことわ」で第144回芥川賞を受賞した。2018年に小説『TIMERESS』を発表。エッセイ集に『抽斗のなかの海』がある。